

危機を共生の機会に — 倫理資本主義の時代 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

ビジネスシーンで哲学が話題になるという異変が起きています。AI=人工知能と哲学をテーマに京都哲学研究所が昨年9月に開催した第1回京都会議には経済界の重鎮が多数参加しました。ただ顔を揃えるだけでなく、熱心にノートを取ったり、積極的に発言する経営者が多かったそうです。

京都会議のハイライトとなったのがドイツの哲学者マルクス・ガブリエルによる基調講演です。NTTの澤田純会長と出口康夫京都大学教授が共同代表理事を務める京都哲学研究所のシニア・グローバル・アドバイザーとして来日しました。

基調講演でガブリエルは自国第一主義の台頭、AIの急激な進化、気候変動による自然災害の頻発などを入れ子構造の危機と表現し、産業界や研究分野の枠を超えた新たな協働による倫理的価値観の創造を訴えました。新年を迎えてガブリエルの問題提起を掘り下げてみたいと思います。

哲学に課せられた使命は

哲学界のロックスターと呼ばれるガブリエルは史上最年少の29歳でドイツの名門ボン大学の哲学科教授に就任し、新実在論を提唱して世界的に注目されました。NHKの「欲望の時代の哲学」などテレビ番組にも精力的に出演しており、著書の『なぜ世界は存在しないのか』は哲学書として異例のベストセラーになりました。ガブリエルと共著『全体主義の克服』を刊行している中島隆博東京大学東洋文化研究所所長は「哲学が生き生き

とした、現実に関与する学問であることを私たちに改めて教えてくれる人物」と評しています。

世界的なビジネスの現状についてガブリエルは自国第一主義による権威主義的資本主義の横行に警鐘を鳴らしています。権威主義的資本主義は市場経済における弱肉強食を助長した新自由主義に由来しているといっているでしょう。経済力や軍事力を背景にした強欲な権威主義は一部の権力者による独占に帰結すると危惧しています。

格差社会や環境破壊など利己的な資本主義の弊害についてはこれまでも政治学者、経済学者、社会学者などが批判してきました。それでは哲学者が資本主義のあるべき姿について論じる意義はどこにあるのでしょうか。「新しいビジネスモデルや社会契約は哲学を検討に含めることではじめて可能になる」というのがガブリエルの主張です。ビジネスにおける善と悪を見極めることは哲学に課せられた使命と確信しているのでしょう。

権威主義的資本主義に対抗してガブリエルは倫理資本主義を唱えています。「倫理と資本主義は融合できる。資本主義のインフラを使って道徳的に正しい行動から経済的利益を生み出し、社会を



マルクス・ガブリエル

大きく改善することは可能だし、またそうすべきだ」と力説しています。倫理資本主義とは何かを体系的に論じた『倫理資本主義の時代』は世界に先駆けて日本で出版されました。

新しい道徳的事実を発見する

『倫理資本主義の時代』は道徳的に正しい行動が普遍的に存在することを説いています。たとえば溺れている子供がいたら周囲にいる大人は助けなければなりません。この場合、溺れている子供の国籍や性別や人種はまったく関係ありません。あらゆる偏見、主観、先入観に左右されずに実行しなければならない道徳的な行為はたしかに存在します。これをガブリエルは道徳的事実と呼んでいます。近代哲学の開祖カントが『実践理性批判』で唱えた内なる道徳法則をわたしは想起します。

ただ道徳的事実は世界全体で共有されているわけではありません。権威主義的資本主義の要因である新自由主義は道徳的事実に逆行しているとガブリエルは批判しています。人間の自由は本質的に社会的自由であり、他者がいなければ社会的に存在することはできません。私利私欲によって他者の自由を奪えば自分の自由も失うことになります。したがって自己の自由を求めるなら他者の自由も尊重しなければなりません。

本書のなかでガブリエルは競争至上主義から協力至上主義への転換を唱えています。競争至上主義は権威主義的資本主義、協力至上主義は倫理資本主義と言い換えてもいいでしょう。まだ社会的に認識されていない道徳的事実を新たに発掘し、協力して堅実に積み重ねていくことが世界の道徳的進歩につながると期待しています。

とりわけビジネスパーソンの役割は重要です。「道徳的事実は実践を通じてのみ理解できる」と日々の企業活動のなかで新しい道徳的事実を発見し、社会に貢献することを促しています。

倫理資本主義を実現するためにガブリエルは各企業に最高哲学責任者=CPOが率いる倫理部門を設置することを提案しています。これは哲学者の甘い夢ではありません。アメリカではグーグルやアップルなどの世界的企業が哲学者を雇用し、哲学コンサルティングの企業・団体も数多く設立

されています。スタンフォード大学人文科学センター国際客員研究員も兼任しているガブリエルは「企業の目的は善行である」と明記しています。

あらゆる視点で価値の創造を

昨年来日した際にガブリエルは京都会議などの講演で「日本には倫理資本主義の卓越した歴史がある」と述べました。卓越した歴史の先駆者とは生涯に500もの企業・銀行・団体の設立に携わり、日本資本主義の創成期を牽引した渋沢栄一のことです。渋沢は1916年に発刊した著書『論語と算盤』で道徳経済合一説を唱えました。論語は道徳、算盤は経済と商売の象徴です。

幼くして漢学者から学問の手ほどきを受けた渋沢が生涯にわたる経営の指針としたのが中国の古典『論語』です。「論語には己を修め人に交わる日常の教えが説いてある」として渋沢は「論語の教訓に従って商売し、利殖を図ることができる考えたのである」と『論語と算盤』に書き記しています。道徳経済合一説の要諦は「富をなす根源は何かといえば仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできぬ」という言葉に集約されています。道理なき富の追求は一時的に実を結んだとしても決して永続することはできないと戒めています。いわば持続可能な企業の条件を明らかにしたといっていいいでしょう。

現代経営学の教祖ピーター・ドラッカーも激賞した道徳経済合一説を倫理資本主義の源流と見做しても過言ではありません。渋沢の探究を念頭にガブリエルは「科学技術の進歩だけでなく、倫理的な洞察による新たな価値の創造が必要だ」と唱えています。新たに創造される価値に唯一の正解はありません。ガブリエルは「すべての視点から問題を見つめることを通じて価値はわかってくる。あらゆる場所からの視点を持つことが重要だ」と述べ、個人や企業や社会がそれぞれの現場で倫理的な価値を創造することを望んでいます。

そのうえで「日本には与えることが受けとることよりも重視される文化があり、ビジネス界でも非常に大きな役割を果たしている。私たちも与えることを学ぶべきだ」と連帯のメッセージを送りました。「危機を、共生を生み出す機会に」と。